

各種調査研究、政策の提言、行政への請願・各種申し入れ、広報活動及び講演会の実施、共通する他団体との協働・連携——を事業とし、環境との共生を考え、活動しているボランティア団体です。



環境と共生

第6号

平成13年12月1日発行 発行：環境21世紀の会 編集：編集委員会 有村親雄
住所：〒277-0042 柏市逆井4-9-5 TEL: 0471-74-2135 FAX: 0471-69-4016

ひびくする環境問題、生活者の側からどう捉え、どう考え、どう実行に移すかが問われています。会員を募集しています。問い合わせ、申し込みは左記総務会まで。

特集

生ごみ堆肥化モデル事業

市南部の柏楽園町会が推進

減量効果の評価システム確立を

柏市南部に位置する柏楽園町会（今城久光会長、大橋基夫環境部長）は、市の生ごみ堆肥化モデル事業に参加し推進中です。現在稼働中ですが、住民の意識も高く効果は大きいものがあります。市はこうした住民の努力をどのように評価し、システム化していくか、問われるところであります。

高い問題意識と導入までの経過

生ごみの40%近くを占める生ごみの資源化とゴミの減量を目的に、町会と組合を11年11月発足し4回の検討を行いました。12年3月に全世帯を対象に生ごみの堆肥化を推進するため、町会有志に



柏楽園町会が取り組む市の生ごみ堆肥化モデル事業

仕様の稼働状況

設備はNTT-MEの最新機種、パイオランナー1BR-60SS、と脱臭機の構成で、最大処理能力30kg/日、単相100V、消費電力175KWです。ランニングコストは、電気代と脱臭剤代（1850円）で1ヵ月当たり約1万3000円です。好気性の脱臭剤（生物A: Microbe G）がもっとも活動しやすい55

設備はNTT-MEの最新機種、パイオランナー1BR-60SS、と脱臭機の構成で、最大処理能力30kg/日、単相100V、消費電力175KWです。ランニングコストは、電気代と脱臭剤代（1850円）で1ヵ月当たり約1万3000円です。好気性の脱臭剤（生物A: Microbe G）がもっとも活動しやすい55

松戸市と比較して

柏市のごみ処理計画に疑問

8月21日、松戸市のごみツアーの行程に参加し、みづうりサイクルセンターの他に清掃工場も見学しました。和名ヶ谷クリーンセンター（和名ヶ谷、平成7年竣工、能力3000t/日）、グリーンセンター（高橋新田、昭和55年竣工、能力200t/日）で、合計1日当たり500tです。松戸市は、市内に焼却

灰の埋立地を持たないため、焼却灰の備であり休炉しています。松戸市は、焼却灰の島県に委託しています。最終処分場を持たないの従って、ごみの減量化と再資源化に積極的に取り組ん

3g（焼却対象は703g）で精々105・5%の伸びです。松戸市の平成25年度における人口予測では50万人弱であり、1日当たりの焼却能力は500tでカバーすると

松戸市の1人1日当たりの総ごみ排出量は、平成5年度で865gであり、平成12年度では91

じられませんが、投入生ごみ容積は24時間で1/5〜1/10になるので連続投入が可能です。通常運転は月曜日から土曜日の16時まで、日曜日の16時まで24時間乾爆させ、処理品の1/3を槽内に残し、残りを取り出し、次の月曜日の朝から新しい生ごみの投入作業の繰り返しです。槽内に残った1/3の処理品の中で脱臭微生物は活動を続けますが、脱臭微生物を維持していくために、1ヵ月に1度の割合で、取り出し時に槽内の残り処理品に0・5%の脱臭剤を補給します。

今後の課題と減量に取り組み評価

堆肥の有効利用として、これまでのNTTのデータによると窒素分は十分ですが、有機質やカリの成分が不足しているため、「生ごみ有機肥料」の良さを広く知ってもらうためには、肥料成分の均一化と完熟させる期間を加える2次加工が必要であり、近づく尾の農業研究センターで共同テストを行う事を計画中です。

ランニングコストの軽減として、今回の機種は機械自体の価格を抑えるため100V仕様にしたが、常時槽内の温度を60度以上にするには、有機質化が必要で、実際に使用してみると距離が近ければ非常に便利で、利用者が急増している今のところは、ゴミ袋の節約程度で、参加者に対する有益還元はありませんが、ゴミ減量に努力している市民を評価できる清掃システム（ゴミの有料化）にする事が本当の意味の公平化であり、ゴミ減量の大きな推進力になると確信します。

今回の「環境と共生」のなかで取り上げたフライブルグ市に関する記事の資料提供を頂いた前田成子さんは、同市交際委員のチェリストを務める日本人のご主人と3人の子供とともに当地で約25年暮らし主婦でもあります。環境問題に対して前田さんは、日本人とドイツ人の意識の差と、子供に対する教育の大切さを訴えている。環

わたり、環境問題に対して前田さんは、日本人とドイツ人の意識の差と、子供に対する教育の大切さを訴えている。環

柏市の新しい環境基本条例が、去る9月の定例市議会で満場一致で可決・制定されました。条例の施行は来年の4月です。

この基本条例の定めるところによって、「環境基本計画」(第9条)の見直し作業、新しい「環境審議会」(第24条)委員の選任、新条例に基づく初めての試みになる審議会付属「部会」(第26条)の構成のための作業などが始まるはずで

す。 <はじめての試みの好事例>この条例の策定の過程に市民の側から関わる機会を得て、そこで感じたことのいくつかを記します。条例制定作業の初期段階で、市は期間限定の「環境市民会議」を設けました。市の環境保全課長なども招いて開催した環境条例を考えるシンポジウムや、それに先立って市民と市の間で論争が継続している第二清掃工場の建設計画にかかわる経験もあずかって力があつたのでしょうか、これは初めての試みであり、好ましい先行事例になるでしょう。

市民セクターからの委員は「分かり易い身近に感じられる条例」を目指して議論に参加しました。市民会議の作成した提言書もその趣旨に沿うよう努めました。提言書の内容が市の条例案骨子に移され、環境審議会の議論のテーブルに乗る段階で(議論を傍聴したのです)、その趣旨はいささか損なわれたようです。

特に審議会の学識者委員は、その学識のゆえをもって課題を一般化して、地域の課題として市民委員が条例案骨子に盛り込もうとの意図を、結果として薄める役割を果たしたようです。問題を捉える地域の住民と学識者委員の意識の違いを感じさせる点でした。条例の中身に關わる審議会委員同士の緊迫感のある議論の局面を見ることもありませんでした。

7月の段階で、条例案骨子について市は「広報かしわ」を通じて市民意見の聴

「柏市環境基本条例」が制定されました

取を試みました。このやり方自体には「問題あり」と言わざるを得ない点があつたのですが、結果的に提出された市民意見(8人から18件一審議会資料集による)に対して、市も環境審議会も応答する機会を設けることはありませんでした。市民意見は結果として黙殺されたこととなります。

新しい環境基本条例では市民意見に対する市の応答を求めています(第17条)。市民の参加と協働、それに対応することは市にとっても手間暇のかかる作業になるでしょう。しかしそれは避けては通れないのです。

<常設の市民会議はならず>大筋として市民会議の提言は、常設の環境市民会議の設置を除いて、盛り込まれました。いや「常設の環境市民会議の設置提案は受け入れられませんでした」と言うべきでしょう。その意味合いは市民参画と協働の理念に照らせば、他のどの条文に増して重いものがあるこの提案が受け入れられなかったことは、現在の柏市政の受容の限界を示すものということになるでしょう。

最後に付言しておきたいことは、この条例は「手続きを定めた条例」であるということです。「環境」ということばが含む意味合いは広いものがあります。その構成要素を教学的に取り上げて、この基本条例が明快な解答を提出するという構造にはなっていません。市にとっても市民にとっても答えは汗をかきながら書くこととなります。市民はそれぞれの関心にしたがって問題の形成をおこなって行政に提起する、市がそれに答える仕組みがポイントです。

市民が主体的にその責務と責任を果たす場面をみずから作りだしていくことを願い、かつそのような場面を予想しています。

(柏市環境市民会議座長 坂倉敏雅)

1992年、フライブルグはドイツ連邦共和国全国規模の環境コンクールにおいて「自然・環境保護の連邦首都」を受賞しました。

フライブルグ及びその周辺地域における、将来を見据えた環境政策が特に評価され、この受賞につながったのです。

<ドイツで最も美しい都市>ドイツ南西部、フランス・スイスの国境に近く位置するフライブルグ(人口は約20万人)は、石畳とゴシック建築の教会で美しい中世の面影を残す町です。ドイツでは二番目に古い伝統を誇る大学も学生数約21,000人おり、学術的でまた若々しい雰囲気のある町でもあります。それ故フライブルグは大学の町、ゴシックの町と言われ、またバーデン・ワインの特産地もそばに控えている所から、ワインの町とも言われています。西側にライン河、東側にシュヴァルツヴァルト(黒い森)山脈を控え、美しい自然に恵まれ、ドイツの中でも最も美しい都市の一つと数えあげられます。

フライブルグは、人間が自然と共生するエコポリスの実現に向けて、様々な環境行政が行われています。ドイツ環境局という部門ができたのもこの町が一番初めて、現在では他の局と共にフライブルグ市内のみならず、パーゼル(スイス)、コルマル(フランス)とも共同で地域システム政策(Regio政策)の核として、研究開発機関とも連携体制を取りながら対策を進めています。フライブルグ市を含む周辺三国は、今や市の環境対策を柱にEC統合の実験場として、文字通り共同で活動している現場なのです。

ちょうど地球時代といわれる今日、この町には国連の機関「地方自治体の為の国際環境機関」の欧州事務局が1992年10月に設置され、国際的なレベルのエコポリスとしての性格を更に強めてきました。

市民の様々な面での環境に対する思いや考えが公民両機関に反映され、住民運動を意味あるものとし、また学術機関の設立や発展に寄与してきました。さらにエコ研究所、自然保護団体、フラウンホーファー物理研究所等(太陽熱研究で世界をリード)、数多くの環境関係機関がこのフライブルグ市で活動しています。とくに再生可能エネルギーに関しては、とりわけソーラーエネルギー(太陽熱)を挙げることができます。例えば、ソーラータワー国鉄中央駅、フライブルグ大大学院では太陽熱冷房などが行われています(写真参照)。



フライブルグ大大学院実験棟屋上の太陽熱集熱器

国際的な環境先進都市、ドイツのフライブルグ

<原則的に焼却法をとらない>フライブルグの町で見られる交通対策、ゴミ処理対策、エネルギー対策、森林対策等、この町のオリジナルな実験例を経て、連邦レベルで広がっている環境対策が少なくありません。

ゴミ・廃棄物処理対策については、生産—購入—廃棄という過程で出されるゴミ処理対策を、既存のゴミ埋立地の収容限度を見直しながら進めています。

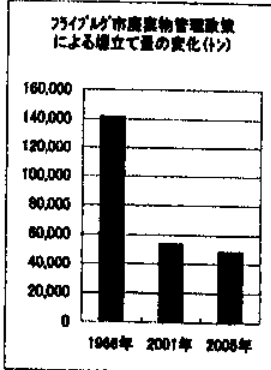
フライブルグ市では、空気汚染の理由もあり、原則的には焼却法を一切とらない方針です。産業廃棄物でも、家庭ゴミでも、基本的にはゴミを出さない対策を前提とした処理法を検討。住民の意識を促す方法を考え、官民共同での対策をサイクリングシステムに基づいたゴミ分離収集システムにより処理しています。大規模なゴミ減量処理システムも検討中で、今後のゴミの出る量を計算しながら、新しい処理方法を絶えず検討しています。

現在の埋立地の地中から出るメタンガス(CH4、地球温暖化現象の原因)のエネルギーを再利用して、市のランドヴァッサー地区(人口9000人)でコージェネレーションシステムにより地域暖房・発電を実現しました。ゴミ埋立地(市内より4.5 kmの所)よりメタンガスを集めることで可能となり、総費用約10億円で1991年春に完成しました。夏はこのゴミガスで十分この全地域のエネルギーを賄えると言われています。冬は天然ガスを補充し、向こう20年間操業する予定です。

家庭から出る生ゴミは今までゴミ処理場に埋められていましたが、1998年より集コンポストが導入され、現在2万人を対象に実験をしています(対象区域の97%が参加)。

この記事をまとめるにあたっては、フライブルグ市でOSMという会社を運営している前田成子さんから資料の提供を頂きました。

OSMは、フライブルグ市当局と連携し、環境、地域経済、観光などに関する同市の日本・アジア地区の業務を代行しています。環境においては、日本からの環境ミッションの受け入れ、環境セミナーの計画・開催などを主業務としています。(逆井 吉野仁之)



第2回バザーの会場風景

不用品のリサイクル活動のために、昨年10月に引き続き第2回目のバザーを開催しました(10月28日)。環境21世紀の会は、年会費1000円も運営しておりますが、現在の会員数はどうも財源不足です。それを補うため、リサイクルを兼ねて年一回のバザーを開催しておりますが、今回も多数の不用品のご寄贈と大勢の方のご参加を頂きまして厚くお礼申し上げます。

大勢の参加ありがとうございました

環境21世紀の会、バザーを開催

編集後記

★柏楽園町会で個人住宅による共同の生ごみ堆肥化のモデル事業が開始されました。導入までの経緯、実施状況、及び今後の課題について詳細に分析されています。参加されている住民の方を含め、関係者の努力は大変だったと思われます。今後の発展を祈ります。

★「国際的な環境先進都市のドイツのフライブルグ」、「柏市環境基本条例の制定」など環境問題で活動されている方々に寄稿して頂きました。どれも読みがいのあるものです。

T・K